

キリスト教主義大学における建学の精神 — 上智大学の取り組み、カトリックにおける良心 —

上智大学はカトリック修道会イエズス会が開設した大学です。大学の設立は1913年ですが、その起源は、日本に高等教育機関の設立を願ったフランシスコ・ザビエルにまで遡ります。現在、多様な背景を持った学生・教職員を擁する上智大学において、建学の理念や教育理念がどのように生かされ、どのような取り組みがなされているのかを講師から聞きながら、現代におけるキリスト教主義大学の課題や使命を共に考えていきたいと思えます。また、カトリックの伝統における「良心」についても理解を深め、プロテスタント的な理解と比較しながら、幅広く「良心」概念にアプローチしていきます。

- 日時：2019年7月5日（金）16:40 — 18:40
- 場所：同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂
- 講演：竹内 ^{おさむ}修一

（上智大学 神学部 教授）

司会：小原 克博（同志社大学 神学部 教授、
良心学研究センター長）

コメンテーター：

横井和彦（同志社大学 経済学部 教授、
キリスト教文化センター 所長）

中村信博（同志社女子大学 学芸学部 教授）



■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail: rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践 良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

講師略歴

竹内 修一 (たけうち おさむ)

1958 年生まれ。カトリック司祭 (イエズス会)。上智大学哲学研究科修了、同大学神学部神学科卒業、Weston Jesuit School of Theology (STL : 神学修士)、Jesuit School of Theology at Berkeley (STD : 神学博士)。上智大学神学部教授。キリスト教文化研究所所長。著書 : 『【徹底比較】仏教とキリスト教』(共著、大法輪閣、2016 年)、“Three Modes of the Embodiment of Conscience,” in *Conscience and Catholicism: Rights, Responsibilities, and Institutional Responses* (Maryknoll, New York: Orbis Books, 2015)、「良心——まことの心——」『時の流れを超えて : J.H.ニューマンを学ぶ』(共著、教友社、2006 年)、「倫理と霊性の交差点——ニューマンの良心理解への一考察——」『J.H.ニューマンの現代性を探る』(南窓社、2005 年)、*Conscience and Personality: A New Understanding of Conscience and Its Inculturation in Japanese Moral Theology* (Kyoyu-sha, 2003)、「和の心とキリスト教倫理」『今、日本でカトリックであることとは?』(共著、サンパウロ、2009 年)、『ことばの風景』(教友社、2007 年)、『風のなごり』(教友社、2004 年)、論文 : 「いのちと平和」(上智大学キリスト教文化研究所『紀要』、2017 年)、「キリスト教における人間観」(上智大学生命倫理研究所『生命と倫理』、2016 年)。

良心学研究センター主催 公開シンポジウムのご案内

■ 「ニューロ・ダイバシティと良心——自閉症を神経構造の個性・多様性として見る」

日時 : 7 月 8 日 (月) 16:40 - 18:40

場所 : 京田辺キャンパス 言館

講師 : 池上英子 (ニュー・スクール大学院 社会学部 教授)、貫名信行 (同志社大学大学院 脳科学研究科 教授)

コメンテーター : 板倉昭二 (同志社大学 赤ちゃん学研究センター 教授)、武藤 崇 (同志社大学 心理学部 教授)

■ 「見えないものを信じるころ——比較認知科学と教育学の視点から」

(赤ちゃん学研究センターと共催)

日時 : 10 月 17 日 (木) 16:40 - 18:40

場所 : 同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂

講師 : 松沢哲郎 (京都大学高等研究院 特別教授)、近藤 卓 (日本ウェルネススポーツ大学 教授)

※ 同志社大学 良心学研究センター編『良心学入門』(岩波書店、2018 年) 好評発売中。

上智大学の歩み

上智大学は、1913年、当時のローマ教皇〔ピウス10世〕の命を受けた3人のイエズス会神父によって設立されました。そのルーツは、聖フランシスコ・ザビエルまで遡ります。ザビエルは、1549年にキリスト教布教のために来日した際、日本人の資質を高く評価し、日本の首都に大学が設立されることを熱望していました。

長い歴史の中で育まれてきた、上智大学の教育の精神は、人間教育を重視したカリキュラムに強く反映されています。全学共通科目の「キリスト教人間学」では、さまざまな角度から人間性の探究を目指します。たとえば、哲学・倫理学・宗教学などを学びながら思索を深め、聖書を通してキリスト教ヒューマニズムの精神を学びます。また、生と死の問題、文学などから人間の尊厳を省察し、国際関係、環境問題、人権問題を通して人間と世界の平和について考察します。

あらゆる学問、研究は、人類共同体や地球への奉仕とつながっています。それを活かす一人ひとりが、信頼によって他者と連帯し、“Men and Women for Others, with Others”を実践することは、よりよい社会の構築につながっていくのです。¹

世界が求める豊かな教養と倫理観

前イエズス会総長のアドルフォ・ニコラス神父は、次のように述べる。²

上智大学での使命は、その設立にかかるイエズス会のそれと密接に結ばれています。イエズス会は、その使命として「和解のミッション」を掲げ、グローバル化した世界のなかで分裂し傷ついたさまざまな関係、人間と自然との関係を和解へと導くために奉仕しようと望んでいます（イエズス会第35総会第3教令参照）。この精神は、新しい「キリスト教人間学」のプログラムにも、独創的な方法で反映されていると思います。人間を、尊厳をもった個人として（人間として生きる）、超越者である神に結ばれたものとして（キリスト教の精神に学ぶ）、そして連帯して社会を形成するものとして（よりよい世界をつくる）、総合的に捉えようとするプログラムが組み立てられているからです。

グローバリズムや効率優先主義が人間を歪めつつある世界では、しっかりした哲学的・宗教的教養に裏づけられた高い倫理性を有する人間が求められます。知識だけでなく、「よりよい世界をつくる」という社会的実践の次元までを射程に入れたカリキュラムは、日本で教員として働いていたときからの私の生きる目標にも大いに響きあうものがあります。

¹ 『上智大学 大学案内2020』より。「他者のために、他者とともに」——上智大学の教育精神。イエズス会の教育の精神を継承したもので、「与えられた自分の才能を自分の利益のためでなく、ほかの人のために役立つこと」であり、「他者に奉仕することによって自己実現を目指すこと」という意味です。なお次の言葉も、イエズス会教育の根本的精神を表している。*Cura personalis: Care of personnel. Cura personalis focuses on the needs and well-being of the individual as an individual.*

² 『キリスト教人間学 授業案内』（2016年）、3頁。

良心——誠実さの^{ありかた}状態

良心は、人格的存在としての人間の深奥に生得的に刻み込まれている。それは存在論的に人間存在を根拠づけ、倫理的に人格の成長を促す。「善をなし、悪を避けよ」——これはわたしたちに対する良心の要請である。良心は、ただ単に、正・不正や善・悪の識別・判断に尽きるものではなく、むしろ、人間が人間として生きるための根本的な^{ありかた}状態を開示する。それゆえ良心において、人間は、自らの究極的根源（神）の声を聞き、それに応えることができる。良心はまた、人間に求められる二つのこと——善い人間となること（倫理）と聖なる人間となること（靈性）——の邂逅の場でもある。

1. 良心の語源的意味

1. *conscience* : 「良心」と翻訳（19世紀）。
2. 孟子（372–289B.C.） : 「良心」を最初に使った人（『孟子』（卷第十一告子章句上八））。
3. 「コンシャンス」 : 「コン」（*con*「〜と共に、全体」） + 「シャンス」（*science*「知」 = 共知）。
 - ①「コン」 : 何らかの共通の地平～普遍性。
 - ②「シャンス」 : 人間の倫理的・実存的知。
 - ③共同体性 : 「何かを共に知ること」「共通の知（を持つこと）」「全体的な知」。
4. *Syneidesis* → *conscientia*.
5. *Synderesis*
 - ① *Synderesis* : 実践理性の第一原理として、人間の心に生得的に与えられている。
 - ② *conscientia* の根拠となるが、それはある意味で抽象的であり、*conscientia* なしに具体的に働くことはない。
 - ③ *synderesis* が誤ることは決してないが、*conscientia* は誤りうる。なぜなら、*conscientia* は、具体的・個別的行为への倫理的知識の判断・適用であるからである。
 - ④ *Synderesis* ≡ 良心。
6. *Compassion* : *com* + *passio* (*cum* + *patir*)。

2. 良心の系譜

1. 「清明心」（古代） → 「正直」（中世） → 「誠」（近世・近代） → 「良心」。
2. 「誠」 : 知的能力というよりは、むしろ、心・感情・心情を表すもの。
3. その意味 : 誠実をはじめとして、完成・高潔・現実・真実など。

3. 良心の経験

1. 良心 ≡ 人格。良心が問われるとき、その人の全人格が問われている。
2. 良心の本質 : 自己に対する誠実さにある。それに反するとき、人間は良心の呵責を覚える。この経験は、良心の倫理的・道徳的側面を表しているが、同時にまた、倫理的意識が相互の信頼の根拠であることも示している。
3. 良心の体験 :
 - ① 先件的良心 : 善悪の判断基準・規範としてはたらく。

- ②後件的良心：誤った行為に伴う良心の呵責。良心のパラドックス。
- ③宗教的次元としての良心：良心は、厳密に言うならば、神の声ではなく、そこにおいて神の声を聴くことのできる場。
- ④「生活の座」 (*Sitz im Leben*)。

4. 自然法

- 1. *Lex indita non scripta*: law inscribed [in the human heart] and not written down (文字によって書かれた法ではなく、人間の心に刻み込まれた法)。
- 2. 良心の奥底に見出す法。

5. 倫理と霊性の邂逅

- 1. 「善い人間となること」(倫理) と「聖なる人間となること」(霊性) の統合。
- 2. 両者の邂逅の場としての良心。
- 3. 良心：ただ単に倫理的範疇に留まるものではなく、さらには、霊性との関係においても捉えられるべきもの。

6. 聖書

たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの良心もこれを証ししており、また心の思いも、互いに責めたり弁明し合って、同じことを示しています。そのことは、神が、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう (ロマ 2 : 14-16)。

7. 良心の尊厳

人間は良心の奥底に法を見いだす。この法は人間がみずからに課したものではなく、人間が従わなければならないものである。この法の声は、常に善を愛して行い、悪を避けるよう勧め、必要に際しては「これを行なえ、あれを避けよ」と心の耳に告げる。人間は心の中に神から刻まれた法をもっており、それに従うことが人間の尊厳であり、また人間はそれによって裁かれる。良心は人間の最奥であり聖所であって、そこでは人間はただひとり神とともにあり、神の声が人間の深奥で響く。良心は感嘆すべき方法で、神と隣人に対する愛の中に成就する法をわからせる。良心に対する忠実によって、キリスト者は他の人々と結ばれて、ともに真理を追求し、個人生活と社会生活の中に生じる多くの道德問題を真理に従って解決するよう努力しなければならない。正しい良心が力をもてば、それだけ個人と団体は盲目的選択から遠ざかり、客観的倫理基準に従うようになる。打ち勝つことのできない無知によって、良心が誤りを犯すこともまれではないが、良心がその尊厳を失うわけではない。ただしこのことは、真と善の追求を怠り、罪の習慣によって、しだいに良心がほとんど盲目になってしまった人にあてはめることはできない (『現代世界憲章』 16)。

8. なぜ人は、美しさを求めるのか

真・善・美——真とは、私たちの理性が目指すもの。善とは、私たちの意志が向かうもの。そして美とは、そのような私たちを、心の奥深くから喜ばせるものにほかならない。これらは、本来、いのちにおいて一つであり、またそうあるべきものでもある。なぜ人は、美しさに憧れるのか——それは、人間は本来、正しいことを知り、善い生き方を求めるからである。真・善・美が、いのちにおいて一つとなる時、私たちは、真の仕合せへと招かれ、周りの人とそれを分かち合い、いのちそのものに感謝する。

9. 「医は仁術」について思うこと

あるお医者さんは、患者さんの部屋に入る前に、一礼をしてから入室すると伺った。この方の態度は、患者さんに対する尊敬・敬意の表れではないだろうか。真・善・美が一つとなった形ではないだろうか。

孔子の思想の根源は、「仁」である。しかし、彼は、仁とは何か、すなわちその定義について明確には語っていない。むしろ、彼は、仁によって人間はどのような人間になるか、について語っている。

この仁を、曾子は、「忠恕」と言い換える。忠恕はまごころの意とされるが、さらに詳しくみるならば、「忠」とは、自分に対する誠実さであり、「恕」とは、他人に対する誠実さのことである。あるいは、「忠」とは、自身のまごころであり、「恕」とは、そのまごころから出る他人への思いやりと考えることもできる。

仁とは人を愛すること——と言われる。釈迦の語る慈悲、イエスの語る愛、そして孔子の語る仁は、端的に同じものではないが、確かに、重なり合うものがある。愛の対象が人間とされ、その人間を知ることが智である、と語られる。

10. J.H.ニューマン (1801-1890)

1. 「良心は、被造物と創造者とを結び付ける原理である」(『承認の原理』)。
2. 「良心とは、そもそもキリストの代理者である」(『英国国教徒の困難』)。
3. *Cor ad cor loquitur* (Heart speaks to heart).